

# 会長からの メッセージ

「社会からの謙虚な受信と、社会への積極的な発言」をしていくなかで、「会長の顔が皆に見える学会」にすることは重要であると考へ、奇数月号に会長から会員、社会に向けたメッセージを伝えるページとして、「会長からのメッセージ」を掲載する。

土木界が激しく変化しているいま、このページを通じて、われわれの学会の会長が何を考へ、どこを目指しているかを知っていただき、各会員が今後の土木界を考へるきっかけとしていただきたい。





第 7 回

# 地域と生きる土木の景観設計

土木学会第97代会長

近藤 徹



「銀座通りを、シャンゼリゼ通りに負けない都市景観につくりかえるんだ」佐藤秀一（当時建設省東京国道所長）さんは、熱っぽく語った。私が銀座共同溝工事の中間検査に行ったとき、佐藤さんは検査をそつちのけで、早朝から翌朝未明まで時間とともに変化する銀座の表情を観察しながら、地上から地下まで引つ張りまわし、このまちの景観をどのようにデザインするのか、その構想をひたすら語ってくれた。

電力、電話、水道、ガスなどのライフライン管理者を都市づくりへの貢献と説得し、老舗の集まる商店会と意見を交換しながら、自動車交通最優先の時代に車道を狭めて歩道を広げる、都電廃止で生まれた御影石を磨いて歩道の敷石ブロックに敷き詰める、伝統のまちの風情を活かした街灯をデザインする、女性の口紅が一番美しく見える照明光を採用する、警察所管の信号も道路管理者の案内標識も統一したデザイン

ンとする、地下鉄の出入口もまちの景観に沿った形状に改造をお願いする、一事務所長の熱意と美意識が、単なる共同溝設置で満足することなく、日本の表玄関として銀座通りの都市空間をデザインしたのである。土木技術者には景観設計に挑戦する場面がきわめて多い。私も思い出がある。ダム工事の設計係長の頃、コンクリートダムの岩着部に曲面を取り入れたフィレットを設けて、荒々しい岩盤とコンク

リート人工面とがなじんだ景観とすること、ダム天端のパラペットは、打放しコンクリートではなく曲面仕上げのプレキャストを真っすぐに通し、照明も内蔵させ、それなりに景観を演出した。しかし予備ゲートの巻上機は天端に突出させたままだった。他のダムで、天端から上にはゲート巻上機も、エレベーターシャフトも突出させない設計にしているのを見ると、担当者の美意識が読み取れてうらやましくなる。

「うよ」と担当者を説得して、お城の景観を守った。若い頃、佐藤さんに育てられた景観設計の心を引き継げたと、自負している。ある著名人が、故郷に架設されたループ橋を見て、「自然に働きかけて、新たな美を生み出す土木構造物は、書画、文芸に勝る壮大な文化資産だ」と、述懐されたことがある。土木技術の粋を尽くした構造物の景観に、感動されたのだと思う。土木は建築に比べて、デザインの面が劣っていると卑下する土木技術者がいる。本当にそうなのだろうか。どちらかというところを創造するという自己主張の強い建築の景観設計に対して、あくまで周囲の景観と共生しようとする土木の景観設計は、地域とともに長く生き続け、愛されるのではないか。またそうでなければならぬと思う。